

2025 年 7 月 13 日 部落解放祈りの日（聖霊降臨節 第 6 主日）礼拝

メッセージ「いのちは誰のものか」

牛田匡牧師

聖書 ヨハネの手紙Ⅰ 5 章 13 - 15 節

今日は「部落解放祈りの日」として、いわゆる「部落差別」だけに限らず、あらゆる差別からの解放を覚えて、祈り求めていく日としたいと思います。その一方で、世界の情勢を見ていると、それとは逆方向に、ますます分断と差別を助長するような流れになってきていることに胸が痛みます。日本もそうです。今はまさに参議院議員選挙の最中ですが、選挙ポスターに恥ずかし気もなく「日本人ファースト」と謳っている政党まで出てくる始末です。東京都で「都民ファースト」と謳っている政党があるのも、上から目線で差別的だと感じてきましたが、そこに国籍や血統を持ってくるとは、まさに「レイシズム（人種差別主義）」であり、日本に在留する外国人や旅行で来日している旅行者たちに、「大きな顔をするな」「国へ帰れ」と言うのは、「ヘイト（嫌悪排斥）発言」に他なりません。

アメリカでは、第二次トランプ政権で、ますます移民排斥に拍車がかかっています。「移民のせいで白人たちの仕事が奪われて貧しくなっている」というのが主張ですが、そもそも白人がやりたがらない仕事を、移民の人たちに低賃金で押し付けているのが現状であるのに、その移民たちを追い出したら、誰がその仕事をするというのでしょうか。日本も同じです。高齢化と労働人口の減少で、働く人が足りないという中、農業や漁業や、建築業をはじめ、介護の世界も今では外国人労働者無しでは、たちまち成り立たないのが現状です。にもかかわらず、そのような現実、真実には目を向けず、ただ単純に自分たちの不満や不都合を、誰かのせいにして、差別し排斥する……。その先には、際限のない差別と排斥の「負の連鎖」が待っていることにどうして気付かないのでしょうか。問題の立て方自体が間違っていますから、一部の誰かを追い出した所で何も解決するはずがありません。次にはまた別の誰かが排斥され、さらに次にはまた別の誰かのせいにされ、そうして最後には誰も生きていくことが出来なくなっていく……。そのような外れた道を歩み出していることが、非常に心配です。

神様は、この世界の全て、全ての命を素晴らしいものとして、「極めて良いもの」として創られたと聖書は言います(創世記 1)。互いに差別し合い、嫌悪し合っているのは、全ての命が生き生きと輝くことはできません。そもそも私たちの命は、頂いている命であり、生かされている命です。自分のものであるようで自分のものではない。全ての命は、命の神から与えられているものだ、と言えるのではないかと思います。

今回の聖書の言葉、「ヨハネの手紙」は、一見すると、とても選別的で排他的な文書に見えます。13 節「神の子の名を信じるあなたがたに、これらのことを書いたのは、あなたがたが永遠の命を持っていることを知ってほしいからです」というのは、「神の子イエス・キリストを信じている人は永遠の命を持っているけれども、裏を返せば、信じていない人は持っていないということ」と読めますが、本当にそうでしょうか。

そもそも「信じる」とは何でしょうか。人が何かを「信じ」ているかどうかは、どうやって判断がつくのでしょうか。確かに、目で見たり、手で触ったりすることが出来る物は、人に伝えて、分かってもらうことも比較的簡単です。「これは固そうだな」「重そうだな」「熱そうだな」など。でも、見えない物で、直接触れない物だったらどうでしょうか。例えば、封をされた段ボール箱の外側に「ワレモノ注意」と書いてあったら、私たちはその箱を注意深く持ち上げて、決して放り投げたりはしないでしょう。また産着にくるまって抱っこされているのが、本当は人形であったとしても、「赤ちゃんだから気を付けて抱っこしてあげてね」と聞かされていたら、細心の注意を払って受け取るのではないかと思います。そのように、誰かが何かを信じているかどうかは、単に内なる思いや考えに留まらず、その人の行動として現れるのだと思います。言葉では嘘をつくことができて、行動や態度はごまかすことはできません。ですから、「信じること」とは、即ち「行動すること」と言えるのではないかと思います。

聖書で言われている「神を信じる」「イエス・キリストを信じる」というものも同じで、そのようにただ単に口で言っているということではなくて、「神の御心」「イエ

ス・キリストの価値観」を自分のものとして、行動しているか、「神に信頼して歩みを起こしている」かどうか、それによって判断されるものだということなのだと思います。

13 節には「永遠の命(ゾーエー・アイオーニオン)」という言葉が登場しますが、私たちはこの地上での肉体が有限であり、決して永続しないということは、先人たちを送って来た体験から知っています。そしてそれは古代の人々も、もちろんそうでした。そのような人類の経験の中で、決して亡くならない命、いつまでも生き続ける命、いわゆる「不老長寿」を願い求めるということは、世界中で大昔からあったことだろうと思います。しかし、聖書で言われている「永遠の命」とは、そのようなこの地上での「不老長寿の命」ということでもなければ、この肉体の死後、時間的にずっとずっと悠久のかなたまで永続していく命という意味でもありません。「ヨハネによる福音書」17 章 3 節に、「永遠の命とは、唯一のまことの神であられるあなたと、あなたのお遣わしになったイエス・キリストを知ることです」と記されています。これはつまり、イエス・キリストの心、価値観を身をもって知り、自分の心として、神様と直接結びついた「真実の命」を生きること、そこに「永遠の命」がある、ということです。そしてそのような「永遠の命」を持つ人は、自分自身と他の人と比べて優劣をつけたりすることなく、互いに掛け替えのない唯一無二の「絶対の命」を与えられている存在として、全ての命を大切にしながら生きていくことができます。それこそが神様の御心に適うことではないでしょうか。

14 節 15 節には「14 何事でも神の御心に適うことを願うなら、神は聞いてくださる。これこそ私たちが神に抱いている確信です。15 私たちは、願い事を何でも聞いてくださると知れば、神に願ったことは、すでにかねえられたと知るのです」とあります。神様が創られた全ての命が、互いに大切にしながら、生きられるようになること。そのような神様の御心に沿って私たちが願うことは、必ず適えられる。だからこそ、諦めないで、また投げ出してしまわないで、神様に信頼して行動し続けようということでしょう。四国のお遍路さんが「同行二人」と言っているように、私たちの隣にはいつも必ず神様が共におられる。命の神は決してあなたを忘れない、見放さない方です。だから、大丈夫、諦めないで、もう一度やってみよう。そういうこ

となのではないでしょうか。

「永遠の命」は、一部の選ばれた人たち、優秀な人たちだけに与えられるご褒美ではありません。ご褒美は数量限定のことが多いですが、「永遠の命」は命の神によって与えられた全ての命が、それぞれに唯一「絶対の命」であると自覚し、しっかりと受け止めることのできる恵みです。隣の人を信頼できず、疑心暗鬼になってしまうのではなく、互いに大切にしながら生きていくことが、神様が共におられることによって可能であると信頼して、行動を起こしてみる、歩み出してみるものが求められています。

差別の根底にあるもの、それは不信感であり、不安感でしょう。安心することができずに不安だから、怯えてしまって、周りを攻撃するのだと思います。聖書の中心メッセージの一つは、「恐れるな」「怖がらなくても大丈夫」です。なぜなら、命の神がいつも共におられるから。すべての命が良いものとして創られ、互いに大切にしながら生きていくことができるはずだからです。人は自分が経験したことしか、なかなか他者に対してはすることできない不器用な存在です。だからこそ、周りの人たちから大切にされたという経験が先にあってこそ、また自分の過ちを赦してもらったという経験があってこそ、自分も周りの人たちを大切にしたい、その過ちを赦してあげたいという気持ちにつながるのだと思います。

「いのちは誰のものか」。全ての命は神様から与えられた頂き物であり、預けられ委託されている預かり物です。恵みとして頂いているものですから、それを競争の材料にしたり、排斥の材料にしたりするのではなく、隣人たちと共に活かし合い、輝かし合うように、活かし合っていく道へと、私たちは今日も導かれていきます。